



## 富山の配置薬を誰もが知る医薬品に押し上げた アイディアマン

ささやま ただまつ  
笹山 忠松 (1926~1981)

笹山忠松(旧姓中野)は、大正15年(1926)金沢市の伝馬町(現在の片町近く)の少林寺に父 中野松巖、母 きくいの次男として生まれた。その少林寺へお参りする人々の中に富山市の笹山ハルと孫の慶子がいた。

笹山慶子は昭和7年(1932)内外薬品商会の笹山順蔵とミドリの長女として生まれた。母ミドリが妹たちの世話で多忙なため、慶子は祖母のハルに育てられた。幾度となく通い合っているうちに、忠松と慶子は気心の知れた間柄になっていった。忠松は大学卒業後、金沢市役所に勤務していたが、慶子の思いを受け入れて、昭和26年(1951)慶子と結婚。富山市の内外薬品商会(現 富山めぐみ製薬株式会社)を背負うこととなった。

当時、全国に薬局が増え、配置薬業が先細りしていくことが予想された。そこで忠松は内外薬品の主力配置薬であったケロリンを薬局にも置いてもらえる一般薬にすることを重役会議に提案したが、旧来の商法を重視する重役たちには受け入れられなかった。しかし忠松は諦めることなく、数人の若い営業マンを引き連れ、自ら先頭に立ち、ケロリンの全国キャンペーンに乗り出した。

しかし、当時、欧米からの効き目の早い薬が重宝されていた時代に、「おきぐすり(配置薬)」の薬を置いてくれる薬局はなかった。そこで忠松は消費者にケロリンを知ってもらい、名指しで買ってもらえるようにすることを目指し、昭和30年(1955)、ラジオを使ったコマーシャル放送を開始した。昭和33年(1958)にはサトウハチローがCMとして初めて作詞し、服部良一作曲、楠トシエが歌うケロリンのコマーシャルソング「青空晴れた空」が全国のラジオから響き渡った。このCMソングの効果は絶大でケロリンは販売数を大きく伸ばした。一方、そのような忠松のやり方に、社内からは「広告費を使いすぎる」、配置薬業界からは「消費者の配置薬離れを促進するものだ」と批判されることもあった。

その後、昭和38年(1963)忠松のもとへコマーシャル湯桶のスポンサー企業を求めて、睦和商事社長 山浦和明(当時営業担当)が訪れた。話はすんなり決まり、山浦がデザイン開発したプラスチック桶にケロリンの広告文字を入れ、東京駅前の「東京温泉」に試験導入した。ちなみに初期の湯桶は黄色でなく白色であった。その後二人は、昼間はケロリンの販売で薬局や問屋を廻り、夜は温泉宿や銭湯で風呂桶を売り込み、昼夜を問わず営業で日本全国を駆け巡った。こうしてケロリンは全国の誰もが知る医薬品に押し上げられ、「くすりの富山」の地位を確固たるものとした。

忠松のアイディアはとどまるところを知らず、富山から空輸したますのすしを新商品と一緒に参加者に提供する新商品発表会の開催に加えて、後楽園球場のすべてのごみ箱への広告の貼り付けや東京タワーの入場券への広告印刷、銀座服部時計店の電光ニュースへの文字広告と、いわゆる「隙間広告」の先駆けにもなった。そしてさらに、新商品の開発・通信販売・海外生産・多角的経営等、新しいものを取り入れ、時代の先端を進む経営者として活躍したが、昭和56年(1981)3月死去した。56歳の若さであった。

<専門員 松井 功一>



ケロリン  
CMソング  
「青空晴れた空」



初代ケロリン桶